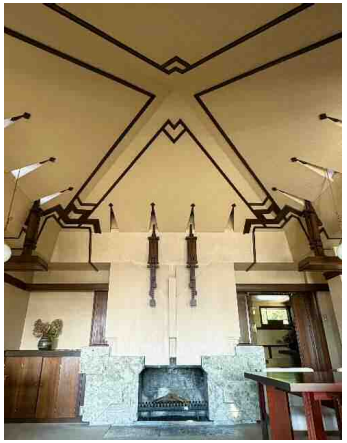
4階 ― 食堂と屋上 ―

“階段を上がって食堂に至る。食堂の南、開けて二段の屋上庭園となる、日本間の屋根と、数段下って応接室の屋上と、ここは眼界が開けて大阪湾が一望の中に入る、東は築港の灯を数え得るべく、西は淡路の島影がもことして煙るのを見る”

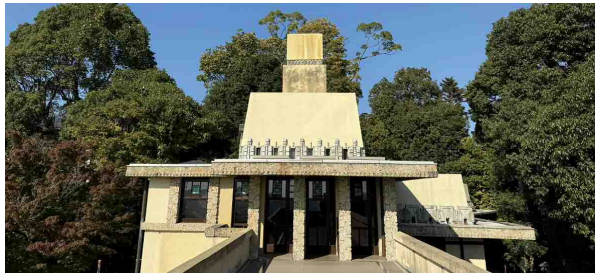


21　４階食堂

22　４階バルコニーからの風景

「夏帽子」

壁よりも外側に大きく飛び出た庇（ひさし）はをもつ屋根もヨドコウ迎賓館の特徴のひとつで、南信はこれを「夏帽子」と例えました。帽子の帯にあたる部分には、大谷石（おおやいし）の砕石と川砂とセメントを混ぜて造られた擬石（ぎせき）飾りが巡っています。



23　「夏帽子」のような屋根

建設当初のくらし

３階には浴室や洗面室、寝室などの生活空間もあります。建設当初のヨドコウ迎賓館では、室内の暖房や台所設備、湯沸かしに至るまで、電気を用いた設備が導入されました。台所設備には、外国製の冷蔵庫や調理器具が使われていたようです。

24　３階洗面室

25　３階浴室

温水と冷水の蛇口がセットになっています。

所有者	株式会社淀川製鋼所	実施設計	遠藤新・南信（遠藤新建築創作所）	敷地面積	5,228.18 ㎡
所在地	兵庫県芦屋市山手町3－10			建築面積	359.1 ㎡
施　主	八代目山邑太左衛門	施　工	女良工務店	竣工年	1924（大正 13）年
基本設計	フランク・ロイド・ライト	構　造	鉄筋コンクリート造4階建		

編集・発行　芦屋市企画部国際文化推進室国際文化推進課　2024（令和６）年 12 月１日発行
〒659-8501　兵庫県芦屋市精道町７番６号

YODOKO GUEST HOUSE

ヨドコウ迎賓館

－ 国指定重要文化財旧山邑家住宅 －

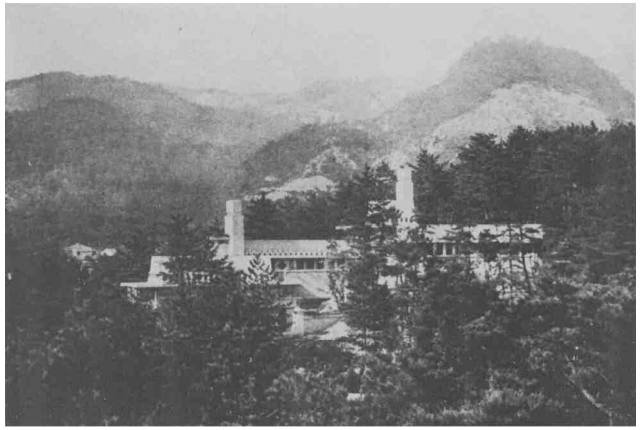
阪神間モダニズムを代表する名建築

ヨドコウ迎賓館（げいひんかん）は、灘五郷（なだごごう）（魚崎郷（うおざきごう））の酒蔵・山邑（やまむら）酒造株式会社（現：櫻正宗（さくらまさむね）株式会社）の八代目当主山邑太左衛門（やまむらたざえもん）の別邸として、1924（大正 13）年に建てられました。当時の芦屋市域は、自然豊かで風光明媚（ふうこうめいび）な環境を残しつつ、交通の発達を背景として農村から住宅地へ急速に発展していた頃で、「阪神間モダニズム」と呼ばれる地域文化が花開き、洗練された芸術や文化、建築、生活様式などが育まれました。ヨドコウ迎賓館は、阪神間モダニズムに彩られた時代を代表する文化財のひとつです。

1　２階応接室

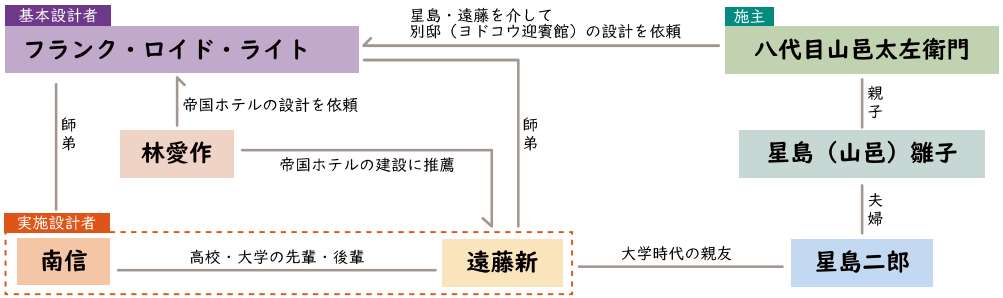
ヨドコウ迎賓館ゆかりの人々

基本設計者のフランク・ロイド・ライトは、東京・帝国ホテルの支配人・林愛作（はやしあいさく）から依頼を受け、帝国ホテルの設計のために 1917（大正 6）年から来日していました。また、この時、林愛作の推薦を受けた遠藤新（えんどうあらた）や、遠藤の高校・大学の後輩にあたる南信（みなみまこと）もライトの弟子となり、帝国ホテルの建設に携わりました。そして、施主・八代目山邑太左衛門（やまむらたざえもん）は、長女（雛子（ひなこ））の夫・星島二郎（ほししまにろう）（後に衆議院議長も務める政治家）が遠藤新と親友であったことから、星島・遠藤を介して、ライトに別邸（ヨドコウ迎賓館）の設計を依頼しました。



2　建設当初のヨドコウ迎賓館（東から）
出典：『建築写真類聚』第 5 期第 13（文化住宅 巻 4）1926 年刊行

このように不思議な人の縁で、ライトはヨドコウ迎賓館の基本設計を行いましたが、1922（大正 11）年、帝国ホテルの設計監理を解任されたため、ヨドコウ迎賓館の着工を待たずにアメリカへ帰国します。その後は遠藤新・南信が事業を引き継いで実施設計を行い、1924（大正 13）年にヨドコウ迎賓館は完成しました。



3　ヨドコウ迎賓館の建設をめぐる人物相関図

フランク・ロイド・ライト

1867 年アメリカ合衆国ウィスコンシン州生まれ。近代建築の巨匠のひとりで自然と建築の調和（＝有機的建築 <Organic Architecture>）を提唱しました。代表作の落水荘（Fallingwater・カウフマン邸／ 1936 年竣工）をはじめとする母国アメリカに残る 8 つの作品は「フランク・ロイド・ライトの 20 世紀建築作品群」として、世界文化遺産に登録されています。

ヨドコウ迎賓館のあゆみ

こうして、八代目山邑太左衛門の別邸として完成したヨドコウ迎賓館ですが、星島二郎の衆議院選挙への出馬にかかる費用を捻出するため、1935（昭和 10）年に実業家に売却され、別荘や事務所として使用されました。また、戦後は進駐軍の社交場としても使用されました。

株式会社淀川製鋼所（よどがわせいこうしょ）の所有となったのは 1947（昭和 22）年からで、当初は社長宅でしたが後に貸家や社員寮としても使用されました。1971（昭和 46）年、老朽化などの理由から解体計画が立案されましたが、市民等による保存運動もあり、淀川製鋼所はヨドコウ迎賓館の保存を英断しました。

そして、1974（昭和 49）年 5 月 21 日、鉄筋コンクリート造の住宅建築ではじめての国指定重要文化財となり、保存修理工事を経て 1989（平成元）年からヨドコウ迎賓館として一般公開されています。

さらに、竣工から 100 周年をむかえた 2024（令和 6）年の 8 月 15 日には、敷地内の倉庫や階段、擁壁、石垣を含む 5,228.18 ㎡の土地全体が国指定重要文化財に追加指定されました。

1918	ライトによる基本設計
1923	着工
1924	上棟（2月 11 日） 竣工
1935	実業家が所有者となる
1945	一時、進駐軍の社交場として使用
1947	淀川製鋼所が社長宅として購入
1959	貸家となり米国人が住む
1963	県道奥山精道線の拡幅工事 門や付属施設が削られる
1971	淀川製鋼所の独身寮として使用（～ 1973 年） 取り壊しの計画が立案され、保存運動が起こる
1972	淀川製鋼所が保存を決定
1974	国指定重要文化財に指定（5月 21 日）
1985	保存修理工事（～ 1988 年）
1989	ヨドコウ迎賓館として開館
1995	阪神・淡路大震災で被災 災害復旧工事（～ 1998 年）
2016	保存修理工事（～ 2018 年）
2020	ヨドコウ迎賓館を構成文化財に含む『「伊丹諸白」と「灘の生一本」』が日本遺産に認定
2023	敷地環境の調査（発掘調査を含む）
2024	土地が国指定重要文化財に追加指定（8月 15 日）

4　ヨドコウ迎賓館関連年表

神戸大学・足立裕司名誉教授の最近の研究では、基本設計は 1921 ～ 1922 年頃、工事は 1925 年末に全体が完成したとされています。

灘五郷と阪神間モダニズム

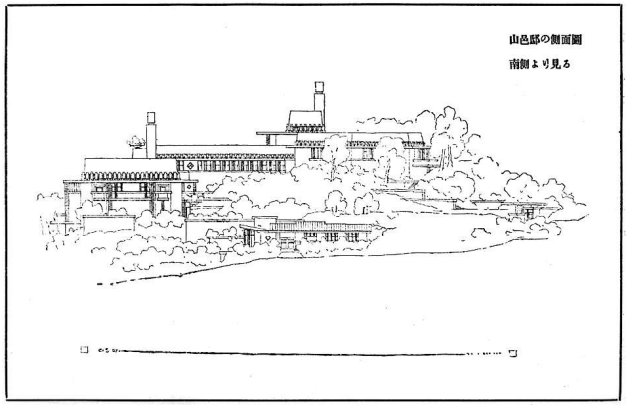
「六甲嵐（ろくろし）」「宮水」などの良質の酒を生む材料と、水車精米による大量生産が可能な恵まれた風土で栄えた灘の酒造り。さらに、港に近く大量出荷ができる立地は、灘五郷の酒造家たちに富をもたらしました。そして酒造家たちは、この地域の芸術や文化・教育の発展に力を注ぎ、阪神間モダニズムの一担い手となりました。ヨドコウ迎賓館や白鶴（はくつる）美術館（神戸市）など、阪神地域では今でも、こうした文化を感じることができます。

このような阪神地域の酒造りと、酒造家が紡いだ文化の物語は『「伊丹諸白」と「灘の生一本」』として日本遺産に認定されています。

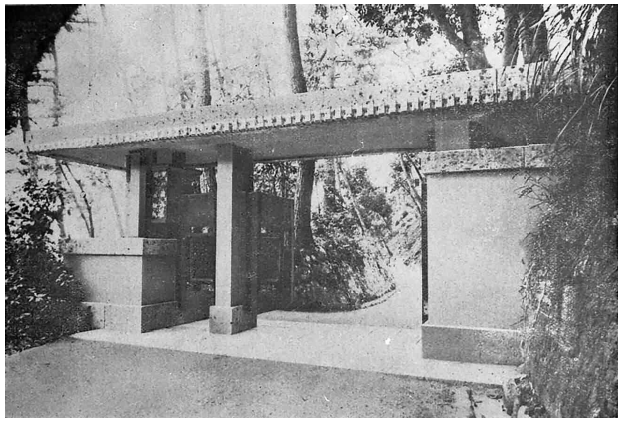
建設当初のすがた

実施設計者のひとりである南信（みなみまこと）は、1925（大正14）年刊行の雑誌『新建築』に「山邑邸解説」を寄稿し、文章と図面・写真で建設当初の様子を紹介しています。これを見ると、敷地の入り口には大谷石（おおやいし）（P.6参照）を用いた表門があったことや、主屋の東側を一段下がった場所に倉庫と温室、使用人の住居、主屋へ続く階段、階段と温室を結ぶ屋根付きの渡り廊下などの付属施設があったことがわかります。また、図面や写真はないものの、付属施設からさらに一段下がった場所に池を設けたことが文章中に記されています。

1963（昭和38）年、敷地東側を通る県道奥山精道線の拡幅工事が行われ、敷地東部が大きく削られました。その結果、現存しているのは階段と倉庫のみです。なお、県道の拡幅工事で削られた場所には一時、建物が建てられおり、現在はこれに伴う構造物の一部も残っています。



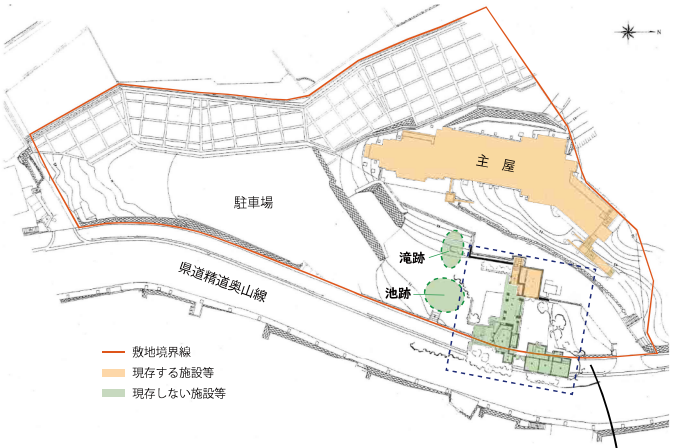
5　設計図（立面・東から）
右手に門、中央下部に付属施設が描かれています。



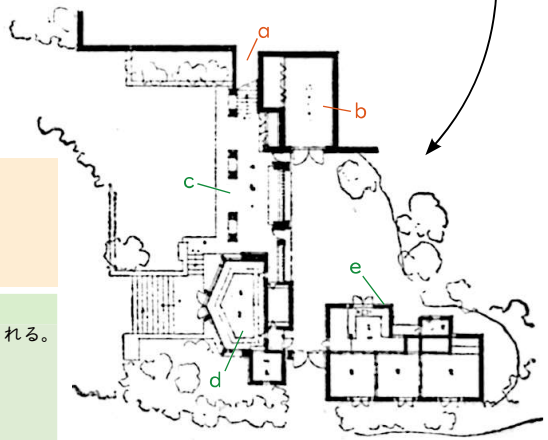
6　建設当初の表門（現存せず）
出典（5・6）：南信 1925「山邑邸解説」

7　現存する付属施設（階段・倉庫）

2023（令和5）年実施の発掘調査で、渡り廊下跡や温室跡、池跡の一部が地中から発見されました。この発掘調査によって、渡り廊下の床に大谷石が張られていたことなど、設計図面や写真ではわからなかった付属施設の詳細が明らかになりました。さらに池跡の西側斜面では滝跡もみつかり、「山邑邸解説」には書かれていない滝の水が池へと流れ込む庭園の姿も明らかとなりました。



8　ヨドコウ迎賓館の主屋・付属施設の配置（一部推定）



a…階段
　現存。壁は鉄筋コンクリート造で、倉庫と一体。
　階段や装飾は大谷石製。
b…倉庫
　現存。鉄筋コンクリート造。

c…渡り廊下
　発掘調査で発見。屋根付きで、床面に大谷石が張られる。
d…温室
　発掘調査で発見。平面が五角形で、
　南に突き出した部分は140°である。
e…使用人の住居
　県道拡幅でほとんど削られており、詳細不明。

9　付属施設平面図／南信 1925「山邑邸解説」に加筆

10　発掘調査でみつかった滝跡

11　発掘調査でみつかった渡り廊下跡と温室跡

南信（みなみまこと）「山邑邸解説」でめぐるヨドコウ迎賓館

建設当初の様子を記した南信の文章をたどりながら、見どころをご紹介します。

緑に囲まれた立地

“六甲の山を一匹の蛸にたとえる、その八方に延びた足の一本があの辺の高地である、その足の突端にまたがって、山邑家住宅は立って居る”

1階 ― 車寄せ ―

“車寄の北端に大きな大谷石のブロックをどしんと置く、建物に対する重しのつもりである、その石をくりぬいて小さなプールとする、壁にはめ込んだ同じ石の飾柱から、ちょろちょろと水が流れて、プールに浮かんだ水蓮の花をゆる

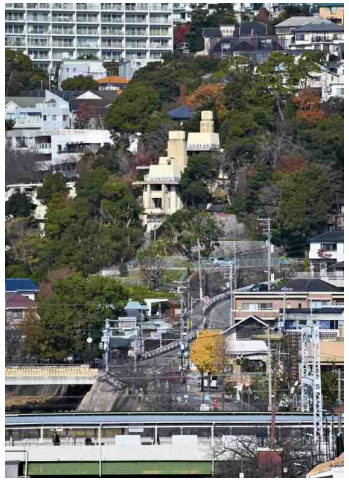
13　1階車寄せ

現在は金魚やメダカが泳ぐ玄関前の水槽。建設当初には、屋上に降り注いだ雨水を集め、2つの水槽の間から滝のように流れ落ちる仕組みになっていたようです。

2階 ― 応接室 ―

“入口の側中央に大谷石の大きなファイアプレース。その内側煙道への入口のあたりに鉄棒を通して、それに錠をかけ得る様にしてある、冬、松の根でも燃やしながら、湯沸かしをかけて、それで渋茶でも沸かそうかという気もち、東西両側に大きな窓を背にして長椅子、南端にバルコニー”

14　2階応接室南側のバルコニー



12　ヨドコウ迎賓館（南から）

ヨドコウ迎賓館は周囲の自然環境と一体化するよう、丘陵の斜面を這うように階段状に建てられています。芦屋市はヨドコウ迎賓館北側の土地を買い上げて山手南緑地として整備し、景観を保護しています。

大谷石（おおやいし）

栃木県宇都宮市産の凝灰岩で、柔らかく、「ミソ」と呼ばれる斑点が特徴です。ライトは大谷石の採れる山を購入するほど気に入り、日本で設計したすべての建物に使用しました。

15　4階バルコニーの大谷石

3階 ― 和室と廊下 ―

“廊下の西手、フレンチドーアの列、ドーアをすかして松林を見る。東、日本間、ここに十畳、六畳、八畳の三間を列べる、東に向かってフレンチドーアが列び、バルコニーに開く、座って対岸の小山を見る。日本間も手法はすべて他の洋室と同様にした、襖と畳と床と地袋と、棄てがたい生活の因襲をそういうものによってつなぐ、ここには常に家族の生活の中心が来る”

16　3階和室

17　3階和室東側の窓

18　3階和室西側の廊下

飾り銅板

銅板で作られた装飾で、銅の錆によって青緑色をしています。植物の葉がモチーフとも言われています。建具など、さまざまな場所を飾るヨドコウ迎賓館の代表的なデザインとなっています。

19　3階和室の欄間に使用されている飾り銅板

たくさんの小窓

各部屋の天井付近に設けられた120個の小窓は、日本の湿度に配慮した通気口です。また、これらの小窓は天井照明のない建物に自然光を取り込む役割も担っているとされています。

20　2階応接室の小窓